

やはりポニーテールの
彼女との恋ははじまっ
たばかりである。【投稿
再開】

ハク真

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大学に入学した八幡は、高校時代の同級生と再会する。

しかし、彼女との距離は曖昧。そんな二人の物語。

八幡の心の成長とともにご覧ください。

※この話の八幡は少しデレやすいです。原作とは登場人物の関係性が少し異なりま

目次

序章

| | |
|---------------|----|
| 意外な再会 | 1 |
| あの場所にて | 4 |
| 突然の来訪者 | 8 |
| 突然の来訪者② | 11 |
| お久しぶりの… | 14 |
| 2章 く変化く | |
| 比企谷八幡のツイてない1日 | 19 |
| 八幡たちのツイてない昼休み | 24 |
| 楽しい楽しい学園祭…? | 28 |
| 楽しい楽しい学園祭…?② | 31 |

序章

意外な再会

一4月、別れの季節も過ぎこれからはじまる新たな出会いに人はみなこころを踊らせている。

しかし、大学生になったこの俺、比企谷八幡はもうそんな期待はしていない。
なぜなら俺は孤高の探求者だからだ。

……ぼっちじゃないんだからね！

いま俺が何をしているかと言うとあれだ、

大学のオリエンテーションの後にある新入生歓迎会という名の牢獄からかろうじて逃げ終えたところだ。

うん、こうゆうときは家に帰って小町の手料理をたべるしかない。

そう思い込んだが、ここで大事なことを思い出してしまった。

俺、一人暮らしはじめたんじゃねえか！

これじゃ最愛の妹の手料理が食べれない……。

よし、死のう、死ぬしかない。

「なに、死んだような顔で歩いてんのさ。」

ん？おかしい。誰かが話しかけてきた気がする。

いやいや、俺にはそんな知り合いはいないし…悲しいな。気のせいだろう。

「きいてんの？あんたにいつてんのよ、比企谷。」

気のせいじゃなかったらしい。誰かと思ひ振り返ると、そこには川越…ちがう、川…

川…

「なんだサキサキか。」

「サキサキゆーな。てか、比企谷もここの大学だったんだね。知らなかったよ。」

「まあな。そもそも3年の時はクラスもちがったし、知らなくて当然じゃねえの？」

そう、こいつ川崎沙希とは3年でクラスが離れ、予備校でもほとんど関わりがなかつたので互いの進路などは知らなかったのだ。

とはいえ、特に募る話もあるわけではないので手短かに別れを告げ去ろうとすると、

「あのさ、久しぶりに会ったんだし、お、お昼でも一緒にどう？」

「悪いな、今から忙しいんだ。また今度な。」

帰って録画したプリキュア見ないといけないしね！

「また今度」ってのはいい言葉だな。それがあろうとなかろうと使える万能な言葉

「また今度」ってのはいい言葉だな。それがあろうとなかろうと使える万能な言葉

だ。

すると、川崎は見るからに落ち込んだ様子で「そっか、急にごめんね。」と言ってきたではないか。

く、この程度で屈する八幡ではないぞ！

「だがまあ、なんだ。お腹は空いたがひとりで食いに行くのもめんどろだな。誰かちようどお昼の人はいないかなー。」

「ぶっ、比企谷ほんと捻くれてるね。」

「うっせ、ほっとけ。」

屈しました。だって普段クールな人があんなしおらしい表情してみろ？ 歯向かえるやついるのか。

もしいたら俺が八幡。パンチをお見舞いしてやる。

負けますね、はい。

「なにひとりでジャブうってんの。ばか？ ほらさつきといくよ。」

「お、おう。てか、どこにいくんだ？ お昼つつてももう2時過ぎだぞ？」

「あんたが行きそうなところ、あそこしかないでしょ。」

そう言つて悪戯っぽく笑う彼女の後ろを俺はそのそとついていった。

あの場所にて

「いらつしやいませ、何名様ですか？」

「ああ、ひとりで：「ばかじやないの？ふたりでしょ。」……ふたりです。」

おつといけない、ついいつもの癖で一人つて言いかけてしまった。ふと目の前に座る川崎を見ると不機嫌そうな顔でこちらを睨んでいる。

「悪かったよ。つい、いつもひとりで来るときの癖だな。しかしお前がサイゼに連れてくなんてな。」

「え？だって比企谷いつもサイゼいつてるんじゃないの？外食は。雪ノ下たちともよくいつてみたいだし。」

なんで知ってる。なに、こいつ俺のこと好きななの？ごめんさい、自重します。なので許してください。

すると川崎は顔を赤くし（なんでだ？）手をパタパタしながら慌ててこう付け加えた。「いや、雪ノ下とか由比ヶ浜目立つし、嫌でも目につくってゆうか。べ、別に比企谷を見てたわけじやないってゆうか。サイゼ：嫌だった？」

かわいいじやねえか、こんちくしょうめ。危うく惚れて告白して振られるところだつ

た。あ、振られるんだ。

「愚問だな。サイゼは俺のソウルフードだ。メニューも全種類に入ってる。」

「あはは、それはどうかと思うよ。それより自宅大好き比企谷がまさか東京の大学に進学してるなんてね。」

そう、なぜアイラブ自宅のこの俺がこうして東京の大学に進学してるかだ。

そもそも俺は地元千葉の私立大に進むつもりだったんだが、親父に男は一人立ちするものだと家を出るように言われ、それだけならともかく小町にまで「ごみいちゃんは一入暮らしするべきだよ。」などと言われ、半ば強制的に家を出ることを決められて、それならと地元の近い東京の大学に進むことにしたのだ。

「あはは、そうだったんだね。なんてゆうか災難だったね。」

「誠に遺憾ながらこうせざるを得なかったというか、なんといいかだな。だが、別にこの大学に不満があるわけではないぞ？ちゃんと自分で選んで決めたわけだし。」

「わかってるって。比企谷が自分の人生選択を適当に済ますようなやつじゃないことぐらいわかってるって。」

む、なんだ？こいつのなかでの俺の評価って意外と高いじゃねえか。まあ別に川崎の前でやらかしたこととかはないし、無駄に低くなってるっていうこともないか。

…ミラノ風ドリアうめえ。

しかし、改めて見ても川崎って美人だよな。ルックスは言わずもがな、スツと伸びた細い足にくびれたウエスト、その上豊満な胸。豊満な胸。大事なことなので二回言っておこう。

なにより綺麗な髪の毛を束ねたポニーテール。見惚れてなんかないんだからね。……ほんとだからね!?

「なに、ぼーつとしてんの?」

「ああ、悪い。」

川崎を観察してた何て言ったらどういう反応するんだろうな。いや、通報されて刑務所のなかだな。やめておこう。

「へんな比企谷。それよりさ、せっかく同じ大学なんだしメアド交換しない?」

断る理由は別にないな。だがなんでわざわざ交換するんだ?文通するわけでもないだろうし。

「ほら、やっといてくれ。」

「そんな躊躇もなく携帯を渡すなんて……。てかあなたの電話帳女の子ばかりじゃない。雪ノ下に由比ヶ浜に生徒会長まで?このすけこまし。」

「なんでそうなんだよ。できたか?さんきゅ。」

その後、大学の講義の話やこの辺の情報など比較的真面目な話を終えてそのまま別れ

た。

：あー、つかれた。帰って寝るか。しかし川崎も同じ大学だったとはな。まあずっと一緒にいるわけではないが、情報交換くらいはできるだろう。思ってたよりあいつとの話を楽しんでいた自分もいた。なんでだろうな。

ブーブー、ブーブー

【川崎沙希】

おつかれ。今日はありがとう。

また時間会うときがあつたら一緒にお昼してもいいかな？

じゃあ、これから大学でもよろしくね。

メールを読み、返信を手早く打つと自然と口角が上がるのをいつもの気だるい表情へと戻して帰路を進んでいった。

【比企谷八幡】

おつかれ。お昼の件、了解。

こちらこそよろしく。

突然の来訪者

おかしい。

絶対におかしいぞ？

今日、日曜日で学校がない俺は一日家でゆつくりと一人の時間を満喫するつもりでいたんだよ？

それなのになぜ今、自宅で女の子とお昼ご飯を食べている？

……ぼっちの悲しい妄想ではないぞ？

たしかに二人の女の子が家で普通にご飯を食べている。

一人はまだ分かるんだ、俺の最愛の妹である小町。

だがもうひとりは何んだ？全く理解ができません。

「なぜ川崎が俺の家にいる？」

そう、なぜか川崎まで家で平然と一緒にご飯を食べながら小町と談笑してるじゃないか。

「なんでいるってそりゃ小町に誘われたからじゃない。わざわざ一人じゃ比企谷の家にはさすがに押し掛けないよ。」

「そーだよ、お兄ちゃん。そんな言い方じゃ沙希さんに失礼だよ？ポイント低いよー。」
そんな二人からの冷たい目線に一瞬怯みそうになるがこんなことでは俺は動じんぞ。
「いやいや、お前たちいつの間に連絡取り合う仲になったんだよ。初耳過ぎてついてけねえわ！」

そもそも小町は千葉にいるだろ？繋がる意味がわからん。」

川崎とは偶然再会してから何度が大学でご飯を一緒にすることがあったり、多少話す機会は増えたけど小町の話なんて1回もでなかったぞ？しかも小町とは最近はあんまり連絡が取れずに何度枕を濡らしそうになったか。

「こないだ少し荷物を取りに千葉に戻ったんだよ。そしたらたまたま小町と会ってね。話をしたついでに連絡先交換したんだよ。」

「それで小町が今日お兄ちゃんのとこに行くからご一緒にどうですか？つて誘ったんだよ！グツジョブでしょ？」

なるほどな、話はわかった。てか小町、グツジョブってなんだ。意味がわからん。そもそも俺にはちゃんとアポとつてくれないうです、ね、わかります。

「ごめんね、比企谷。急にじゃ迷惑だったかな？」

そんなしおらしく言うんじゃない。かわい…んんっ！なんでもない。まあ小町にアポを取って言うのが難しいか。

「まあ来たもんは仕方ないし食うもん食ったらはやめに帰れよ。俺は今日用事があるからな。」

「お兄ちゃんの用事ってどーせプリキュアでしょ？大丈夫、大丈夫！まっ、なんだかんだ追い出さないお兄ちゃんだし？長居させてもらうよー！」

「あ、あたしは忙しいならすぐ帰るからね！……（もう少し居たいけど。ボソツ）」

はあ、せつかくの休みなのににぎやかになっちゃった。まあたまにはこんな休日もいいか。小町に久々に会えたのは単純に嬉しいしな。そして最近の俺はなぜか少し川崎といると楽しいっていうか妙に落ち着くんだよな。なんでかわからんけど、奉仕部の奴らに似てるような似てないような。

だから、川崎さん？俺は難聴系主人公じゃないから聞こえてるからね？勘違いしてもしらないよ？しないけど。

「はいはい、勝手にしろよ。けどあんまり騒ぐんじゃねえぞ。」

突然の来訪者②

「あつ、小町用事を思い出したからそろそろ帰るねー。」

「いやいや、小町ちゃん？ほんとに急に来て急に帰るのね。別にいいんだけどね？」

「ならあたしも帰ろうかな。あんまり長居しても悪いし。」

「お、川崎も帰るのか。これでやつと一人でゆつくり寝る時間ができ……」

「いやいや、小町は一人で帰れますんで、せっかくですし沙希さんはお兄ちゃんと若者同士ゆつくりしていただくさい！」

「……ませんね。なにいつちやつてるの小町。あなたの方が若者でしょ？てか俺が女の子と二人つきりで部屋で過ごすとかレベル高すぎだからね。それこそ村人が革装備で魔王を相手にするみたいなものだぞ。無理ゲー過ぎるだろ。」

「ではでは小町はこれでー！お兄ちゃん！すっかりやるんだよ？じゃあねー！」

「そう言うとはたばたと慌ただしく小町は帰っていった。」

「あ、おい！小町！ったくほんとに帰りやがったよ、あいつ。」

「ごめんね、比企谷。あたしもすぐ帰るからさ。」

「いや、大丈夫だ。こつちこそ悪いな、こんな状況にしちまって。なんだ、茶でも飲むか」

「？」

そう言うのと、川崎はこくりと頷き俺は茶を用意して持っていく。自分の分のマックスコーヒーも忘れずに。いや、しかしこの年になつてもあの甘さには病み付きになる。ありえねーって思つてるやつでてこい。俺が美味さを五時間ぐらい語り尽くしてやるから。

「ありがと。それにしてもほんと小町って元気だよ。天真爛漫って言うかさ。」

「全くだ。いつも振り回されて敵わん。まあそれがあいつのいいところでもあるんだけどな。」

これは本音だ。実際小町の明るさに何度も救われたこともあつたし。高校時代にも奉仕部のことで悩んでいる俺にいつもアドバイスをくれたり、助けてもらった。そのおかげでいまも雪ノ下や由比ヶ浜ともなんとかうまくやってこれてるしな。

「比企谷いま他の女の子のこと考えてたでしょ？」

なに川崎さんエスパーなの？心の中読めるの？それこそラスボスじゃねえか。どうして俺のまわりにはこんなにエスパーが多いんだよ。

「いや、考え事ないぞ？本当だ。」

「ふふつ、冗談だよ。でもほんとに比企谷ってシスコンだよ。高校のときからちつとも変わってない。」

「それを言うなら川崎だつてシスコンだし、ブラコンじゃねえか。大志のやろう未だに小町と仲良くしてやがる。今度沈めるか。」

小町に近づく野郎共は一人残らず消し炭にしてくれるわ。

「比企谷? (ゴゴゴゴ)」

「ひつ。なんでもありません。」

怖すぎだろ。いまの川崎の目線なら日本のひとつやふたつ軽く葬れるところだぞ。これからこいつのまえでは大志撲滅計画を話すのはやめておこう。

その後はなんでもない様な話題の会話を少しして、川崎は帰っていった。

「今日はありがとね。比企谷が良かったらまた遊びにいつても、ううん、なんでもない。ならまた大学でね。」

帰り際に川崎が言ったこの台詞に一晩悩まされ、次の日寝不足で学校に向かったのは八幡しか知らない。

お久しぶりの…

太陽が煌々しく光を放つようになり、気付けば服装は長袖では暑く汗ばむ季節になってきた。俺も大学に入学し、早三ヶ月が過ぎ、七月になり、今日も気温が高く暑いはず。…はずなのに、俺はなぜだかさつきから背筋が寒くてたまりません。

「久々に顔を見せたかと思えば、これはどういうことかしら？大遅刻谷くん？」

はい、この方ですね。先程から俺に氷点下の眼差しを向けているのは元奉仕部部长である雪ノ下だ。

なぜいきなりこんなに怒らせているのかって？それは雪ノ下が言っている大遅刻谷くんというほぼ原型のない名前からわかるように、やつちまったのだ、遅刻を。俺は元から遅刻は全くしたことがないという人ではないが、今日はだめだろ!!

今日は久しぶりに奉仕部で集まろうと前々から由比ヶ浜が積極的に誘ってきた結果、そこまで乗り気じゃない俺や雪ノ下も動き会うことになっていた。まあ、ぶっちゃけ楽しんじゃないこともなかったもので、前の日ははやめに寝て寝坊しないようにするつもりだったんだが、見事にやらかしてしまった。もうこの眼差しで氷漬けにされて召すんじゃないかしら、俺。

「まあまあ、ゆきのん。ヒツキーだってわぎとじゃないだろうしき、許してあげようよ。それにせつかく久しぶりにあつたんだしき、時間がもつたじゃないじゃん！」

「たしかにそれは一理あるわね。由比ヶ浜さんもそう言つてることですし、比企谷くん、命拾ひしたわね。」

神はたしかに存在したんや。ありがとう、由比ヶ浜さま。てか雪ノ下、命拾ひつてマジだったの？八幡泣いちやうよ？

「いや、ほんとにすまんかった。恩に着る、雪ノ下、由比ヶ浜。」

「あら、素直を謝つただけは好感が持てるわよ。」

「ヒツキーも謝つたことだし、さつそくいこー！ほら、ゆきのん！はやくはやくー！」

アホの子、由比ヶ浜は今日も元気だな。おもいつきり雪ノ下引つ張つてるし。なんだ、雪ノ下も嬉しそうにしてるし、懐かしいな。…いくか。

一一一

それから近くの喫茶店に入り、簡単に近況報告などをしあつていたが、俺がポロつとこぼした一言から二人の視線が再び痛いです。

「なんでサキサキがヒツキーのうちに遊びに来てるの？わたしたちもまだ行つてないのに。」

ひつ。さつきは女神のはずだった由比ヶ浜もその面影は全くなく、にらみをきかせて

尋問をしてくる。

「いや、あれだよ。川崎と偶然大学が一緒だな。そこで話すようになってなりゆきで来たというか。当然一人でじゃないぞ？小町が連れてきたようなもんだしな。」

八幡、嘘は言ってません。だからもう少し暖かい目を向けてくれないかしら？某猫型ロボットさんみたいにさ。暖かい目（キラキラ）。自重します。

「小町さんが？それはまた珍しい組み合わせね。その二人つてなにか接点はあったかしら？」

「それはだな、川崎が実家に荷物を取りに帰ったときにたまたま会って仲良くなったらしいんだよ。詳しいことはしらんが。」

それにしても、よくよく考えると小町のコミュ力高すぎないか？ほんと感心するほどに。とてもぼつちを極めてる男の妹とは思えんな。さすがは小町、そこに痺れる、憧れるう！

こうしてそのあとも尋問が続いたり、由比ヶ浜のアホな発言をいじったり、時間はあつという間に過ぎていった。そろそろお開きと駅まで三人で歩いて向かっている時、なんだなふと考えることがあった。

高校のときのある一件以来、こいつらとも疎遠になつていたときもあったけど、こうやっていま三人で会って話しているのも、こんな俺をこいつらが認めてくれたからなん

だよな。だからこそこいつら二人は俺にとって、ってなに一人で語ってんだよ。柄でもねえし、やめだやめだ。

ドンツ

??「あつ、すみません！」

おつと、考え事してたら人にぶつかってしまったじゃないか。ほんとに俺らしくもない。

「いや、こちらこそすみません。大丈夫ですか？」

??「はい、大丈夫です！」

「よかった。それでは。」

怪我とかさせないでよかったぞ。これから考え事しながら歩くのはやめるか。あぶないしな。

「もー、ヒツキー！危ないよ、ぼーっとしないの！」

「そうだな、わるい。」

一一一一一

先程のぶつかった場所でおそらく男の人がぶつかったとき落としたのだろう学生証をもった女は少し顔を高揚させ、他の人には聞こえぬではあろうポリウムで眩いてい

た。

?? 「あの人、比企谷八幡っていうんだ。そっか。やっとまた会えたつ、八幡くんつ。」

2章 変化

比企谷八幡のツイてない1日

『モーニング占い、最下位の発表だよーっ！』

最下位は……ごめんなさい！獅子座のあなたつ。

今日1日はツイてないことが多いかも…。

外出の際は気を付けてねー！

それでは1日がんばっていつてらっしやーい！』

ただでさえ憂鬱な月曜日、学生なら学校、社会人は仕事の始まりを表す日である今日、めずらしく朝食を食べながらテレビをつけるとこれだよ。別に占いを信じているわけではないが、どうも自分が最下位だと知るとどうにも気分は落ちてしまう。

はあ。

「はあ。」

おっと、声にも出てしまった。まあでもあれだ、朝の占いつてのは集団に対してやつてるもんだろ。だったら集団に所属してない俺なら関係ないじゃないのん？やだ八幡悲しい。ばかやってないで、さっさと学校行くか…。

一
一一
一一

……まじかよ。いきなりで何があったかわからんやつに説明してやろう。俺はあのあと支度を済ませて大学に向かつてたんだ。いつも通り電車で通学してる途中、前の車両が人身事故を起こしたらしくあっけなく俺が乗った電車は遅延。講義に間に合うか厳しい感じになったんだよ。

ここまでならまだいいよ？けどなんか講義に間に合ったかと思えばその講義はなんと急な休講、さらには次の講義の出席に必要な学生証までどこかで落としてしまったらしい。ここまでくるといよいよやばくねえか？さすがの俺でも朝の占いを信じざるを得なくなってきたぞ。しかもまだ1日は半分も残ってる。俺、もしかしたら今日で天に召されるじゃないのん？

「あれ、比企谷じゃん。あんたなにやってんの？こんなところですごい負のオーラ出して。」

「ん？ああ、川崎か。いや、気にしないでくれ。ちよつと呪われた運命に絶望してただけだ。お前こそどうかしたのか、昼休みにこんなところにひとりでいるなんて。」

「え？あたしは今から普通にお昼だけど。悪かったね、ひとりで。そういうあんたこそひとりじゃない……って、それはいつもか。」

ああ、忘れかけてたが、こいつも高校のときぼっち予備軍だったな。自分のぼっち力

が高すぎて霞んでたぜ。やだ八幡カッコ悪いっ！だか、この俺だてにぼつちで鍛えていない。ここはひとりでも優しく見守ってやろうじゃないか。

「ああ、悪い。察してやれなくて。次からは野暮な質問はやめておくよ。」

「…なんかいった？」

「いや、なんでもありません…。」

「いやいや、まさに蛇に睨まれた蛙とはこのことです。こいつはあまり怒らせないようにしよう。うん、そうしよう。」

「ふふつ、まあいいよ、そんなことはさ。それより比企谷さ…このあと暇だったりする…？もしよかったら、お昼でも一緒にどうかな…？いや、嫌だったら全然良いんだけどさ！」

「まあ、別に忙しいわけではないぞ。ていうか別に初めて一緒に昼飯食うわけじゃねえんだしよ、そんな遠慮がちに言わなくていいんだぜ。」

実際、大学で再会してから何度か一緒に昼飯を食ってるしな。別に川崎と一緒に昼飯を食うのも嫌でなかったりするかもしれないかもしれない。まあ、今日は色々ツイてないことがあったが、たまたまだろう。こいつと一緒に飯食うのは嫌なことじゃないし、むしろツイてるって思わなくもないしな。

「あつ、沙希ちゃんだっ！おーいっ！」

「え？なんだ、かなでじゃん。」

「なんだなんてひどいじゃん！沙希ちゃんってば！」

どちらさままでしようか？八幡いきなり初対面の人の前で平然とできるほどコミュニケーションの出来た人間じゃないよ？川崎さん、説明ぐらいしてくれてもいいんじゃないのん。帰っちゃうよ？

「あつ、ごめんね比企谷。この子は竜胆（リンドウ）かなで。あたしと同じ学部なんだ。」
「そうそう、沙希ちゃんにはいつもお世話になってるんだーっ！よろしくね。」

なんだか小町と一色を足したみたいなやつだな。小町のテンションに一色のあざとさが合わさって出来たみたいだ。もちろん、俺なんかが仲良くなりそうなタイプの人間ではないな。見るからにリア充感がやばいし。まあ、ルックスは人目を引くものがあるが、よく川崎と仲良くなったな。あいつもこういうタイプ苦手じゃなかったか？

「ああ、よろしく。」

「ああ、それでかなで、こいつが…」

「比企谷八幡くん…でしょ？」

!?!何で知ってる。おれはこんなやつ会ったことも知り合いにもいないぞ？

「かなで、あんた何で知ってるの？もしかして知り合い？」

「んーん。八幡くんさ、前から気になってたんだよね。八幡くんっ。よかつたらさ、うち

と付き合ってくれない？」

前言撤回だ。ツイてないことなんてない。

やっぱり、今日の俺はツイてない。

八幡たちのツイてない昼休み

「八幡くんっ。よかつたらさ、うちと付き合ってくれない？」

な、な、こいつ会って早々ともねえ爆弾を落としてきやがった！こんな爆弾発言をしやがるもんだから、見ろ、となりでさーちゃんも赤くなつて口をぱくぱくさせてるじゃねえか。俺は別にこんなんじや動じないけどな…。

「いや、あの、その。」

めちやめちや動じてますね、はい。いや、だつてね？伊達に長年ぼっちライフ送つてきてないからね？こんないかにも青春してますみたいな、告白イベなんて経験したことないぞ？

俺が動じまくって固まってる、川崎はかなりあわてた様子で爆弾っ娘にこう捲し立てた。

「か、かなで?!あんななにいつてんの?!そんな会つてまもない人に付き合つてだなんて!その、なんていうかさ、もつと色々段階踏むとかさ、あるでしょ普通!」

「えー、なんで?というか、段階つてなに?ただ少し時間あるかなって聞いたただだよ?」

………ん？

「…え？時間？いや、かなで、あんたさ比企谷とだ、男女交際的なものをしたいんじゃないの？」

「…男女交際？……いやいやいや、う、うちはそんなつもりで言うたんちやうよ!?そ、そのちやうねん！ただ八幡くんにお礼がしたかっただけやねん！」

ちよ、待て、待つてください。新しい情報が多すぎてついていけねえ。まず、みなさんすみませんでした。青春の告白イベが俺にも到来とかぼつちらしからぬ発言をしまいました。八幡反省っ！…そこ、そんな目でみない。

それより、もつと気になることがひとつある。普段なら面倒ごとは勘弁だし、触れずにスルーするだろうな。だが、今回は敢えてふれさせてもらおう。

「えーつと、関西弁…？」

「あ、またやつちやつた。気を付けてただけどなあ。実はうちね、大阪出身なんだよね。普段は意識して標準語話してるつもりなんだけど、興奮したり冷静じゃなくなったりしたら、つい関西弁が出ちゃうんだよ。びっくりしたよね？ごめんね。」

「そうだったのか。まあ驚いたが別に謝ることじゃない。」

「それより、かなで。あんたお礼つて言つてたけどどういうことなの？」

よく聞いた。ナイスださーちゃん。いいぞ、さーちゃん。…怒られるな。やめよ。

「俺も聞きたかった。俺、竜胆だっけか？お前に会ったことあるのか？」

「まあ、覚えてないよね。私ね、入学してすぐの時、構内でちよつと迷子になっちゃって、それでたまたまそばを通った八幡くんに聞いたんだよ。おかげでそのときは助かったんだー。それで、すぐお礼しようと思っただけ、八幡くんほんとすぐどつかいっちゃうんだもん。だから探してたんだ。」

「なるほどな、まあ大体理解した。けど別にそんなお礼とか言われるようなことはしてねえよ。尋ねられてなかったら、たぶんスルーしてたしな。」

「それでもお礼がしたかったんだ、ほんとにあのときはありがと。」

「お、おう。」

そんな笑顔でお礼言われちまったから、少し、少しだぞ？ドキツとしてしまったじゃねえか。…ゾクツ！なんだ？なんか俺の隣から妙な寒気が。…気のせいか。

一一一

「けど、沙希ちゃんと八幡くんが知り合いだったなんてねー。なんというか、世界つて狭いんだね。」

「まさか、かなでが言ってたお礼したい人って比企谷だったんだね。驚いたよ。まあ、でもよかったね、お礼できて。」

「うんっ。」

それはもう、見事な俺の空気っぷりですよ。さっきからふたりはそれは楽しそうにガールズトークしてますしね。さすが八幡、空気力高すぎい!…空気力つてなんだ?

そうして、さりげなく俺が帰ろうとすると、

「あつ、そーだ!八幡くんっ!これ、学生証。前、落としたよね?拾ったの、今日渡せてよかったー。」

「え?あ、俺やつぱ落としてたんだな。いやその、助かった。さんきゆな。」

「いえいえー。良いんですよっ」

おかえり、マイ学生証。ごめんよ、八幡離さない。

「あつ、時間。比企谷、かなで!あたしたちお昼ご飯食べてない!もう次の講義始まる時間だよ!」

「…あ。」

やはり、今日の俺たちはツイてない。

楽しい楽しい学園祭…？

「学園祭??」

「そう。あんたどうせ暇でしょ?もしよかったらなんだけど一緒にいかない?」

そう俺に話すのは最近はもっぱら一緒にいることの多くなつたサキサキこと川崎だ。こいつも元々俺とにてぼっち属性があつたこともあり同士としてよくこうして昼飯などを一緒にするようになった。

こいつの言う一緒にいかない?とはお互いにもちろんサークルなどには所属してないため出店などを回ろうと言う意味だろうが、わざわざ誘つてくるとか勘違いしちゃうよ?それで告白して撃沈しちゃうまでである。

…撃沈しちゃうのかよ。やだな。

「なんでわざわざそんなリア充の集いに行かなきゃいけないんだよ。やだよ、めんどくさいし。」

学園祭なんてあれだろ?ウェイでフューでヤッホーイだろ?絶対にそんな状況を目の当たりにしたら俺、死んだような目になる自信あるよ?おいそこ!もともと目は腐つ

てるとか言わない!

「たしかにリア充の集いつてところは否定しにくいけど、そういうところ行ったことないし、せつかく大学生になったからさー一度は行ってみたいじゃん。

それにあたしも暇だし比企谷も暇でしょ。別にいいじゃない。ね?」

「いや、俺はアレがアレでアレだから暇じゃないんだよ。だから他当たってくれ。」

「はいはい、分かったから当日ー時に大学正門ね。」

こいつ俺の扱い雑になつてきてないか? てかさんな強引にしたつて八幡負けないからね!

一一

「こんにちはー!! K 学園祭、K フェスによろこそー!!」

負けちゃつてるじゃんつて? 仕方ないよね、あのあとでも渋り続けてたら川崎すつごい悲しそうな顔で見てるんだもん。普段の感じとのギャップがたまら…んつ!

…ギャップ萌えつていいよね。

そんなくだらないことを考えてると白いワンピースを見に纏つた川崎がいつもの様にポニーテールを揺らしながらやつてきた。

「おまたせ。ありがとね、来てくれて。」

そういつてなにやらそわそわし始める。俺もこういう状況には慣れないので、同じくそわそわ。なんだこれ。

助けて！誰かー！この空気どうにかしてえ！

（お兄ちゃん！こういうときは愛してるでいいんだよ！）

（ばかやろう！とんだ爆弾発言じゃねえか！）

（もー、しょうがないなあ。とりあえず服装は褒めてあげなよね。わかった？）

（おお、さすが小町だ。恩にきる！）

と脳内小町と謎のやり取りを交わし、意を決して川崎に対してしっかりと告げてやる。

「おう、服装いいんじゃないか。似合ってるゆぞ。」

……………。

おうちに帰りたいよお。小町い。

楽しい楽しい学園祭……？②

前回のあらすじ！孤高の男こと、この俺、比企谷八幡は前回慣れないことをしようとしたせいでおうちに帰りたくまりました。めでたし、めでたし。

…おい、そこ！こつち見て笑うんじゃねえ！

「さて、来たのはいいものこのういう場ではどう楽しむのが正解なんだろうね。」

いや、川崎さん？あなたから誘ったのに全くなんにも考えてなかったのね。いや、全然構わんが。

「うし、帰るか。それがいい。」

「ひ・き・が・や？」

ヒッ！なんつー顔してんだよ。もう眼力が某滅びの呪文越えてるじゃねえか。あの映画おもしろいよね。

「い、いや。まあ、とりあえず適当に出店とか見て回るんじゃねえか？わからんけど。」
「そうだね。お昼もまだだしご飯探しつつ回ろっか。」

そういつて歩き出す川崎について、いつものごとく半歩下がって歩きだしたのはいい

が、やはりリア充の巣窟。見渡す限り人、人、人。俺、最後まで耐えられるのかしら？

一

くあの子、かわいくね？ほら、ポニーテールの。>

<ベー、マジだ。お前声かけてこいよ！>

しかし、こいつすごいな。さつきからずっと川崎チラチラ見られてんじやねえか。しかも俺と違った良い意味で。やっぱり目立つんだな、川崎。まあたしかにルックスやスタイルと人より秀でてるところは多いもんな。それになんかオーラあるし。

てか一緒にいる俺は全く認知されてないまでである。お昼食べてる時なんて並んで座ってたはずなのに俺のこと気付いてるやつ一人もいなかったぞ。ステルスヒッキーまじばねえ…。

「あつ。」

ん？急に立ち止まって川崎のやつなに見てんだ？あ、射的の景品か。

そこにあつたのはシンプルなデザインな黒のシユシユ。

「あれ、欲しいのか？射的のやつ。」

「い、いや！別に大丈夫。ほら！早くいこ！」

いや、そんな露骨に顔を赤くして否定しなくてもいいだろ。あいつも大概素直じゃないな。先々いつちまうし。サキサキだけに。…こほん。

「つたく。はやいつつの。」

ん？川崎と一緒ににやら男が二人一緒にいるな。一人は金髪の戸部みたいなやつ。もう一人が赤髪の戸部みたいなやつ。すげーなこの大学、戸部がいつぱいいるじゃん。べー、べーよ。

とか戸部になると、あちらはなにやらあんまり雰囲気はよろしくない模様。

「ねーねー。君さ、俺らと一緒に回ろうよー。隙でしょ？」

「は？いいって行ってるでしょ。どっか行きな。」

「そんなこと言わずにさー。俺たち楽しませちゃうよ？」

つたく、あいつ。先々行くからだぞ。面倒後とは嫌なんだけどなあ。川崎も嫌がつてる様子だし、それを黙ってみてるのも気分はあんまよくないしな。仕方ない。

「おい、その辺にしといてやれ。そいつもあんま乗り気じゃないみたいだぞ。」

「あ、比企谷。遅いじゃない、あんたなにやってたのさ。」

「いやいや、お前が急に一人で先に進んでったんだろ。」

…しかしだ。あんまなにも考えずに『俺が来た！』ってヒーロー感出しちゃったけど、どうすつかなあ。

「あ？なんだお前。関係ねえやつは引つ込んでろや。」（金戸部）

やつぱは噛みついてきますよねえ。

「いや、そうしたいのは山々なんだが。今日はこいつ俺の連れなんだわ。だから申し訳ないけど他を当たってくれ。」

「お前みたいな目が腐ったやつより俺らみたいなやつと同じ方が楽しいに決まってんだろうが、引っ込んでろや」(赤戸部)

君たち語尾の引っ込んでろやはデフォオなの？それとも流行りなの？口悪いからやめなさい。それと目腐ってるはわざわざ言わなくても分かっているから傷口えぐらないで！！

「まあ、たしかに俺よりあんたらみたいなのウエイのが楽しむのは上手いだろうが、今日の相手は俺だし現に空気読めてないのはそっちだからな。」

さて、良い具合にお相手さんも熱くなってきたし、そろそろ事態の回収するのでしょうか。

「なんだと、てめえ!!あんま舐めてっつとブツ飛ばすぞ!!」

「比企谷！危ない！」

遂に耐えきれなくなったのか青筋全開の金戸部が俺を殴ろうと拳を振り上げ、今にも振り下ろさんとしている。さっきまで傍観に徹していた川崎もさすがに焦った様子で叫ぶが当の俺は冷静だった。

「殴るのは構わんが、いいのか？さすがにこんだけ騒いだからか周りの視線はこつちに

集まつてゐるみたいだが。立場が悪いのはそつちだと思ふんだけどな。」

人の視線は時に凶器にへと変わる。これは俺の体験上間違いない。視線を意識しない人はその意識が高かれ低かれこの世には存在しない。意識していないと言う人は所詮は綺麗事を並べているにすぎない。だから人は自らを着飾るし、人付き合いをステータスとしてしか見ないものもある。悪事を人前で大つぴらに見せびらかしたりもしない。そんなのは誰もが理解していることだ。

「ちつ。もういい、行くぞ。」

戸部一也も例外ではなかったようで、苛立ちながらも居心地が悪そうに去つていった。川崎も少し気まずそうにしているがまあ大丈夫だろう。とりあえずこの場を離れるとするか。

「おい、川崎。行こうぜ。ここまで注目を浴びるのは苦手だ。」

「比企谷。助けてくれてありがとう。けどあんま無理しないでね。あんたが危険な目に合うの、なんていうかき、すごい嫌だから。」

「あー、おう。善処する。」

一一

「もうそろそろ帰ろうか。」

あのあと少し出店を回ったあと、あまりの人の多さに二人ともダウンしベンチで話していた。さすがぼっち二人体力無えな。

「そうだな。…あのさ、川崎。」

「ん? どうしたの?」

「あの、なんだ、これ。やるよ。」

そういつて黒のシュシュを川崎に手渡す。

「これ…。どうしたのさ、これ。いつのまに。」

「さつきはぐれたときに妙に射的がしたくなつてな。偶々取れたのは良いんだが俺は使えねえから。まあ今日は意外と悪くなかったからそのお礼つてことだ。要らなかつたら捨ててくれ。」

「ふふつ。あんたらしいね。ほんとに不器用なんだから。」

比企谷、ありがとね。」

「おう。」

そういつて別れた後も川崎の笑顔と言葉がなぜか頭から離れなかつた。

一あんたが危険な目に合うの、すごい嫌だから一